

## 小林陵侑選手の歴史的快挙を祝う

盛田 常夫

スキージャンプの小林選手がジャンプ週間で史上3人目のグランドスラム（4大会すべてで優勝）の快挙を達成した。日本国内ではジャンプ週間総合優勝が大きく取り上げられているが、欧州ではグランドスラム達成に沸いている。

スキージャンプ W 杯は今シーズン 30 戦近い試合のうち、第 8 戦から第 11 戦の 4 戦はジャンプ週間と呼ばれる特別な大会になっている。W 杯の点数計算のほかに、4 戦の総合得点（総合優勝）の表彰が行われる。66 回（66 年）の歴史の中で、この 4 戦すべてに勝利したジャンパーは、2003 年のスヴェン・ハナヴァルト選手と 2018 年のカミル・ストッホ選手の 2 名しかいない。ジャンプ週間の総合優勝や W 杯の総合優勝を飾ったり、五輪金メダルをとったりした選手は多くいるが、ジャンプ週間で 4 冠（グランドスラム）を達成した選手は、この 2 名だけなのだ。それほど、形状が違う 4 つのジャンプ台すべてで優勝することが難しい。W 杯最多勝のシュリーレンツァウアーや、五輪の金メダルに 2 度も輝いたアマン選手でも成し遂げられなかった快挙である。小林選手の伝統あるジャンプ週間の歴史に、67 年の歴史で 3 人目のグランドスラム達成選手として名を刻まれることになった。

札幌五輪を前にした 1972 年、笠谷幸生選手はジャンプ週間の第 1 戦から第 3 戦まで優勝し、ジャンプ週間総合優勝へ残すはあと 1 戦、グランドスラム達成まであと 1 勝となったが、国内の五輪選考大会に出場するために第 4 戦を棄権して日本へ戻ってしまった。当時の国際スキー連盟やスキージャンプのファンは残念がった。ジャンプ週間にたいする日本のスキー界の認識が極めて低かったとしか言いようがない。ジャンプ週間の歴史に名を残す大きなチャンスをみすみす失ってしまった。それから 47 年を経て、小林選手が笠谷選手の無念を晴らし、グランドスラムを達成したのだ。

小林選手はジャンプ週間 4 勝を含めて、今季 W 杯 11 戦で 8 勝という驚異の快進撃を続けている。はたして、この好調はどこまで持続するのか、スキージャンプファンはその成り行きを見守っている。

スヴェン・ハナヴァルトの評によれば、小林選手は近年まれなほどの技術的完成度をもっているという。助走から空中姿勢へ移る技術は完ぺきに近く、少々のミスや追い風をものもしない強さを持っている。

最近のスキージャンプ競技ではコンピュータ技術が取り入れられ、踏み切り台から着地点までの 7 か所で風速が測られ、風速に応じて加点（追い風の場合）や減点（向かい風）が細かく計算される。数年前までは、風に関係なく、飛型点（空中姿勢と着地姿勢）と距離だけで勝負が決まっていたが、風の要素を中立化させるきわめて複雑な計算になっている。

また、今シーズンの Eurosport の中継画面では、踏み切り速度、踏み切りから 20m 地点での

速度、着地速度の測定値が画面表示されている。遠くに飛ぶために、踏切のスキー速度が速い方が良い。さらに、最初の空中姿勢に入った時に、風の影響を受けて減速するが、減速度合いが小さければ小さいほどよい。そこから重力にひっぱられて加速され、着地点では踏切速度から 20-25%ほど速度が上がるが、失速ジャンプの場合には極端に速度が落ちる。小林選手の特徴は、空中姿勢に入った時に減速せずに、逆に 1 k m/h ほど加速する。これが他を寄せ付けない技術になっている。また、踏切り地点に設置されたカメラは、踏切時の膝の曲がり具合(角度)を表示している。135° から 140° の角度を保っていれば、絶妙のタイミングでの踏切となるが、角度が大きければ早すぎる踏切になり、角度が小さければ遅すぎる踏切になる。早すぎても遅すぎても、滑走速度を空中へ最適に持ち込むことができない。この間の時間は 100 分の 1 秒の世界である。ジャンプ台によって踏切りのタイミングが異なるから、最適な踏切りで飛び出すのが難しい。非常に繊細な競技だと言える。

2000 年前後の日本選手の全盛時代を知っている者にとって、ここ 20 年は不本意な時代だったが、ようやく小林兄弟や 佐藤幸椰選手、中村直幹選手などの若手選手がトップ 30 に顔を出すようになり、世界の舞台で闘えるジャンパーが育ってきた。多くの国が世代交代で苦しんでいる中、ようやく日本のジャンプ陣に光明が見えてきた。